

年間第二十四主日

2019.9.15

ルカ 15・1-32

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日のイエスさまのおことばは、ルカ福音書 15 章に収められている、多くの方にとって何度も聞いたことのある、なじみ深い、そしておそらく最も心に残っている大好きなイエスさまのおことばではないかと思います。ミサの時間があまり長くならないように、今日の「聖書と典礼」ではルカ 15 章の中の最初の二つのお話だけを聞くようになっていますが、あらためて聖書を開いてみると、ルカ 15 章には今日の箇所のとにもう一つ大変印象深い、これも何度も聞いたことある放蕩息子のたとえと言われるお話が続いています。

そのようにルカ福音書 15 章の全体を見てみると、そこにはイエス様が語られたひとつながりの三つのお話が収められており、そのいずれもが、迷い出た一匹の羊を探し当てた羊飼いの喜びを語るお話であり、なくした銀貨を見つけ出した一家の主婦の喜びを語るお話であり、放蕩息子の帰りを狂喜して迎える父親のお話です。そして、このような喜びこそが、わたしたち一人ひとりに向けてられている父なる神のお心であるとイエス様は語りかけておられるのです。

もう少し詳しく見るなら、最初の見つけ出された一匹の羊のお話の結びには、「このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」と述べられており、見つけ出された銀貨のお話では、「このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と言われています。このように見ると、これらのお話に続いて語られる父親のもとに戻ってきた放蕩息子のお話は、悔い改める一人の罪人の具体的な姿を語るお話であると受け止めることができます。

悔い改めるとは、父親からせしめた遺産を手を、父親のもとを飛び出した息子が放蕩のかぎりを尽くした挙句に、自ら陥って行った悲惨な現実打ちのめされて、初めて自分の愚かさを悟ったように、本当の自分に立ち戻って、再びわたしたちすべての者の父親である神のもとに立ち返るということです。「放蕩息子」はわたしたち一人ひとりであるようにも、神さまの御目に映る人類全体の姿のようにも思えます。そのような息子たちの帰りを、狂喜して迎える父親の姿こそ、わたしたちの全ての者の父なる神のお心なのだといイエスさまは示してくださるのです。父なる神さまの大いなる喜びは天の全体に広がる喜びです。天のすべての天使たちを巻き込む大いなる喜びそのものです。イエス様に教えられてわたしたちが信じているわたしたちの父なる神は、そのような喜

びの渦の中心におられるわたしたち全て者の父なる神です。わたしたちのこの世の、父なる神のもとを離れ去った「放蕩息子」としての悪戦苦闘がいつか自己破産し、挫折する時、その惨めさの中から立ち上がることができるなら、もう一度自分が見捨てた「父の家」を思い出すことができるなら、わたしたち全ての者の立ち帰る日を待ちわびてくださる父なる神の愛の懷の中で、わたしたちは、わたしたちの首を抱きしめてくださる父なる神の無限の喜びの中にいる自分を見出すことが出来ることでしょう。

イエス様が語り聞かせてくださった、父なる神の愛の福音を信じるとはこのようなことです。何度も何度も、イエスさまのこのお話に耳を傾けなければなりません。人生に行き詰まり、あらゆるものが信じられなくなる時、人間関係に疲れ、自己嫌悪の闇に落ち込む時、イエス様が語り聞かせてくださったこの福音を、放蕩息子が父の家を思い出したように、思い起こさなければなりません。自分がたとえどのような状態の中にあっても、イエスさまのこのお話がわたしたちを立ち上がらせてくるように、何度も何度もこの福音のおことばを心に刻んでおきたいと思います。